

1.2 「里浜づくり」へ寄せる想い

●海岸のハードもふくめた提案を、県、地方整備局が受け止められる前向きの体制づくりが大事

新しい政策の推進では、霞ヶ関での意思の継続性も大事ですし、地方整備局や県の担当者への理念の周知と共有も不可欠だと思います。海岸は地方自治体の努力が不可欠です。その場合、このフィールドでの海岸のハードもふくめた提案を、県、地方整備局が受け止められる前向きの体制づくりが大事なのですが、そこは対応できないということだと、里浜＝イベント、になってしまうと思います。

市民の方々と専門家や行政にしても、本当に大変な場合に、一緒にその海岸のことを一緒に考えてくれるかどうかだと思うのです。問題を一緒に解決した時間が共有できれば、信頼関係は一步前進すると思います。中津はそういう点では、人に恵まれてきました。行政側もハードルを乗り越える仕事をしてきたと思います。

一方、なかなかそれがうまくいかない場合も多いので、その場合には、官の後援のイベントをやるだけでも、地域での位置づけは一步は進むので、それもそれでいいかもしれません。官学民協働のイベントも意味はあるのですが、次の一步を想定していたのが、里浜だったと思います。

東京大学大学院 総合文化研究科 清野聡子

●みちしるべを読んで、その行間にある「里浜守人」とは何かを知って欲しい

東京湾の20世紀の後半は海にとっては不幸な歴史で綴られている。干潟の飛行場は巨大な空港になり、塩田は工場になり巨大なコンビナート群となり、浅瀬はゴミの島となり夢の島と呼ばれ、葦原はテーマパークになった。漁場はそれら埋め立てによって狭まり、海面を油が覆った時期もあった。東京湾は死の海とまで報道されたこともあったし、事実奇形の魚を釣り上げたこともあった。どこまでも発展の名の下に海は死に行くかと思われたのだが、幾つかの経済変化と政治的な変化が東京湾を救った。その中でも私が活動をして来た東京湾の湾奥の三番瀬では奇跡ともいえる偶然が、その干潟浅海域を残して来た。しかし、保全という言葉も再生ということも考えていなかった行政が仕切る海には、里海・里浜という考えも文化も存在せず、開発の影に消えようとしていた。東京湾は三番瀬によって生きていると発信を続けて来たことが奇跡へと繋がったのかもしれないが、地元NGOが行政とともに考え、ともに問題解決のための海のあり方を模索するという協同が、奇跡を現実にして来た。現実につなげるためには三番瀬というフィールドでの独自の調査研究データを盾に、漁業者、地元企業、地元行政、県、国の主張を共通の言葉にすることがもっとも重要だった。漁師の言葉を役人に伝え、企業の論理を漁師に伝え、NGOの動きを県に理解させる。それだけで10年が経った。

21世紀を迎えて、環境への考え方は大きく転換して来た。特に沿岸については大きな方針変更となった。自然再生と護岸防護の管理について柔軟性を持ったといえれば解かり易いかもしれない。その変化の現われともいえるのがこの「里浜づくり」である。三番瀬も埋立計画という難からは逃れたが、未だに人のエゴに振り回されて再生には至っていない。が、これまでの取り組みはこのみちしるべに記すことができた。どうか、このみちしるべを読んで、その行間にある「人のエゴでなく、海の声の代弁者としての里浜守人」とは何かを知って欲しい。皆さんの里浜を見つけて欲しい。そして会議ではなく「海というフィールド」での行動に役立てていただければと心から願っている。

三番瀬研究会 代表 小埜尾精一

●今後とも、人と海辺とのふれあいの場として、地域を巻き込んだ里浜づくりに取り組んでいきたい

私が子供の頃には、近くに遠浅の浜があり、よく遊んだものです。裸足で砂浜を走り回ったり、アサリや馬刀貝を取ったり、カニを捕まえたり、浜に打ち上げられた海藻を拾って投げ合ったりしたこともあります。夏場には、もちろん海水浴を楽しんだものです。

その浜も、高度成長時代には、市街地の海辺は産業活動に提供する場としてどんどん埋め立てられ、港湾整備とともに経済活動の拠点へと変わっていきました。また、海岸整備は防護と国土保全が優先され、まっすぐな護岸と消波ブロックで囲まれていきました。今では、背後の松林が昔の面影を残すのみですが、あの頃の景色は、今でも良く覚えています。当時は、国民生活の向上や脆弱な社会資本の整備への要請から、それが一般的に当然のこととして行われ、結果的に人々から海岸線が遠のいていきました。

しかしながら、海岸環境への認識の高まりや、海洋レクリエーション需要の増大から海岸法が改正され、海岸の整備にあたっては、防護と国土保全に併せて利用と環境が求められるようになりました。私たちも、地元の人たちと協議をしながら、人が海辺とふれあい、親しめるような海岸整備を行って来ているところです。

今後とも、行政の立場から、人と海辺とのふれあいの場として、地域を巻き込んだ里浜づくりに取り組んでいきたいと考えております。

大分県土木建築部 参事兼港湾課長 山路茂樹

●人々の記憶の中にある海岸との繋がりを見直して

「里浜づくり」とは、地域住民が自らの海岸を見直し、その潜在的な魅力や魅力の顕在化を妨げている課題を再発見することから始まります。

是非、全国各地の行政や地域の方々には、そのような目で海岸を見直して頂きたいと思います。例えば、日本全国の多くの海岸で、地域の人々と海岸との繋がりが、一見するだけでは、見られなくなっているとしても、町並みや路地に、生活の習慣に、人々の記憶の中にその繋がりは、必ず残っており、新しいかたちで蘇えることを待っている筈ですから。

国土技術政策総合研究所空港研究部空港ターミナル研究室長 上島 顕司